

## 審査講評 日本水大賞顕彰制度委員会 審査部会長 松尾友矩

日本水大賞顕彰制度審査部会より今回の応募状況並びに審査・選考の経緯についてご報告申し上げます。当審査部会は「日本水大賞」を選考するため顕彰制度委員会の下に特別に設置されたもので、水環境・水資源・水文化・水防災等の分野にかかわる学識経験者15名によって構成されています。これまでの審査と同様に、日本水大賞募集要項に明記されている「日本水大賞の対象範囲」及び「審査基準」を基に、提出された書面を対象として進められました。また、必要な場合には、併せて提出された追加資料を参考にしながら厳正に審査を行い、日本水大賞の各賞の候補を選定しました。候補となった各活動は、顕彰制度委員会に報告され、審議に付されて、最終的に日本水大賞及び各賞が決定したものです。

なお、本年度から、農林水産大臣賞、文部科学大臣奨励賞、の二つの賞が関係省庁のご理解により加えられています。関係各方面からのご支援に感謝申し上げます。

### 応募状況：

今回の応募総数は201件で、前回の266件よりは若干減少しましたが、内容的には優れたものが多く、審査には頭を痛めました。地域別では、三重県、島根県、徳島県を除く44都道府県からの応募があり、全国的な関心を持たれている表彰制度となっていることが分ります。活動主体別については、個人、行政、の二つの活動主体が増加していますが、学校、企業、団体での退潮の様子が見られたところは残念なところでした。活動分野別では、昨年度と同様に、水環境にかかわる件数が多く55パーセントを占めていました。続いて、水文化23パーセント、水資源17パーセント、水防災5パーセントの割合となっていました。

### 審査結果：

本年度の日本水大賞・グランプリの栄誉に輝いたのは、「沖縄県立宮古農林高等学校環境工学科環境班」の活動で「宮古島の命の源である地下水を硝酸態窒素の汚染から守る活動」です。宮古島という限られた地下水資源の保全に立ち向かう活動は、過剰な施肥を避ける有機質肥料の開発研究と普及は、問題解決型研究としてレベルの高い成功例として高く評価されました。

国土交通大臣賞には、「山梨市立日川小学校」による、「日川地区少年水防隊」の活動が選ばれました。武田信玄時代からの伝統的な水防技術である「大川倉横結操法」を小学生が受け継ぎ、文化遺産としてのみならず、実際の河川防災に活用する体験を継続する活動は、地域の防災意識を高める上でも注目されるものとして高く評価されました。

環境大臣賞には、「三島自然を守る会」による、「富士山南東麓の地下水－柿田川地下水到達日数算定と応用」の活動が選ばれました。地下水の水文分析に成果を挙げ、自然の恵みに甘えていた住民意識を目覚めさせ、地下水の揚水規制、節水、富士山の植樹などの運動へ波及効果をもたらした成果が高く評価されました。

厚生労働大臣賞には「淀川水系の水質を調べる会」による、「琵琶湖淀川水系の水質保全と次世代の育成を目的とした水質調査活動」が選ばれました。市民のイニシャティブによる地道な水質調査の実績と複数府県にまたがる広範な調査と継続的な報告書、ガイドブックの作成などの活動が高く評価されました。

農林水産大臣賞には、「白川中流域水土里ネット協議会」による、「水循環型営農運動」の活動が選ばれました。水

田の地下水涵養機能に着目し、水張りをする農法の積極的な意味を明らかにした活動で、熊本地域独特の水づくりの実践としても高く評価されました。

文部科学大臣奨励賞には、「山形県遊佐町立西遊佐小学校第6学年」による、「総合学習『命あふれる西通川にしたい』」が選ばれました。総合学習の内容として、水に親しみかつ川の生命を知ろうとする取り組みが優れていること、また児童、教師、地域の協力も完成度が高いことが評価されました。

市民活動賞には、「特定非営利活動法人北上川流域河川生態系保全協会」による、「モクズガニの養殖と河川生態系の保全」の活動が選ばれました。モクズガニの食文化の継承の中で、生息環境への意識を高めている活動はユニークであり、村おこしの観点からも高く評価されました。

国際貢献賞には、「Youth Water Japan」のグループによる「ユース世界水フォーラム」の活動が選ばれました。平成15年3月に開催された、第3回世界水フォーラムに際して組織されたグループの活動は、世界の若者に対して、水問題の重要性を喚起する活動をボランティアベースで進めたものであり、その実績と発展性への期待は大きいと評価されました。

奨励賞としては①「東京大学生産技術研究所沖・鼎研究室」による「ヴァーチャルウォーターを考慮した世界水資源アセスメント」、②「新潟粗朶業協同組合」による「伝統工法の継承・技術開発指導」、③「滋賀県琵琶湖研究所」による「琵琶湖環境監視技術の高度化」、④「魚野川を育む会」による「第25回魚野川川下り大会並びにクリーン事業」、⑤「伊那テクノバレー リサイクルシステム研究会」による「天竜川水系全域における水質調査と河川美化への取り組み」、⑥「梅尾ルネッサンス103」による「生き残りをかけた源流の村の復興運動『小丸川源流ルネッサンス』」、6件が決まりました。例年に比べて奨励賞が多くなりましたが、多様な活動が行われるようになってきた水にかかわる活動の盛り上がりの反映と積極的な意義を認めたものであります。

審査部会特別賞は「PHスタジオ」による「船をつくる話」のプロジェクトに決まりました。ダムへの貯水を使って山の上に船を引き上げようとする面白い活動です。

# 審査講評 青少年研究活動賞 審査部会長 千賀裕太郎

## 賞の概要と応募状況

「青少年研究活動賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校生徒による水環境に関する調査研究活動に対して授賞するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテストに日本代表として参加することになります。2003年は、国内選考を勝ち抜いた山口県立厚狭高等学校が「低酸素濃度に対するメダカとカダヤシの耐性について」と題して25ヶ国からの代表に混じって研究成果を発表し、審査員の高い評価を得ましたが、惜しくも受賞を逃しました。なお受賞したのは南アフリカの高校生の「新聞紙で作った細長いりボンに種を貼り付けた、簡易で効果的な種まき方法」の開発研究でした。途上国における実際的な問題解決に役立つ研究ということで評価されました。

さて今年は、全国から15件（北海道1件、東北1件、関東7件、近畿1件、中国2件、九州沖縄3件）の応募がありました。いずれも高校生らしい身近な水環境・水資源を対象にした力作がそろいました。

## 審査経緯

審査は、水部門の専門家5人からなる審査部会において、ストックホルム・ジュニア・ウォータープライズの国際コンテスト審査基準に従って、厳正に行われました。この基準は、関連性（水環境がかかえる重要な問題に取り組んでいるか）、創造性（問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性がみられるか等）、方法論（明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか等）、テーマに関する知識（既往研究のレビュー、参考文献、適切な情報源、用語の理解）、および実際的な技術（生徒自ら測定や実験機材を作成したか、展示事物の作成を行ったか等）の5項目からなり、審査員がそれぞれの専門的見地から行った審査の結果を持ち寄って慎重に審議して授賞案を選考し、これをもとに「日本水大賞顕彰制度委員会」において入賞が最終決定されたものです。

## 審査結果

第3回の青少年研究活動賞に輝いたのは、沖縄県立宮古農林高等学校環境工学科環境班の「宮古の水を守れ～土壌蓄積リンで環境に優しい有機肥料作り～」です。高校が立地している宮古島はサンゴからできた琉球石灰岩が風化した土壌で覆われています。その唯一の水源である地下水に含まれる硝酸態チッソの量が年々増加して飲料水基準値の10ppmに近づき、危機的状況にあります。宮古農林高校環境班の研究は、この対策として農業に用いられている化学肥料の量を抑制するため、サトウキビ製糖工場の廃棄物であるバガスや糖蜜から堆肥をつくり、さらにこれにバガスから製造した粉炭を加えて、農業者が使用しやすいペレット状の有機堆肥の製造に成功しました。そしてこの有機堆肥の施用が地下水中の硝酸態チッソの濃度を低下させることを実験的に確認しました。こうした一連の研究は、単なる原因追及の研究にとどまらず、悪戦苦闘しながらも地域の人々と協力しながら、地元の材料を使って実際的な問題解決を目指しており、また提案している地下水汚染対策も普及の可能性が高いものです。こうした農林高校生による地域資源の循環を通じた持続的な農業を追及する姿勢は、まことに賞賛に値するものと言えます。ストックホルムでの健闘に心から期待しています。

審査部会特別賞を受賞した静岡県立浜松湖南高校自然科学部は、昨年度、浜名湖上流にある佐鳴湖の汚れの原因を突き止める研究活動で審査部会特別賞を受賞したのに続き、今年度はヤマトシジミを用いた佐鳴湖の浄化を提案して、科学的かつ社会的にいっそう進展した研究活動が高く評価されたものです。

受賞された高校のみならず、惜しくも受賞にいたらなかった他の高校についても、大変熱心な研究活動を行った生徒の皆さん、そして熱心にご指導された教員の皆様に、審査員一同、心からの敬意を表明して、審査講評といたします。